

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第148集

きよ す じょう か まち い せき
清洲城下町遺跡 X
あさ ひ い せき
朝日遺跡 X

2021

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

清洲城下町遺跡と朝日遺跡は、愛知県清須市から名古屋市西区にかけて広がる愛知県を代表する遺跡です。両遺跡は、愛知県北西部に広がる尾張平野のほぼ中央に位置し、木曾川の支流である五条川の流れとともに、古くから多くの人々が生活を営んできました。特に弥生時代の朝日遺跡は、農耕の受容とともに大きく発展し、日本列島における東西文化の結節点となりました。一方戦国時代の清須城は、京都応仁の乱以後に尾張地域の守護所がおかれ、後の織田信長の居城となり、その後の天下統一に向けての礎となりました。本能寺の変以後には、織田信雄をはじめとする城主による改修が行われ、東海地方を代表する城郭・城下町として栄えました。

清洲城下町遺跡と朝日遺跡は、古くから遺物の採集調査、文献史料による研究などが行われ、特に昭和末期からは周辺の開発事業に伴う発掘調査が数多く実施されて、遺跡の様子が徐々に明らかになってきました。昨年11月には、あいち朝日遺跡ミュージアムが開館し、これまでの発掘調査成果を広く県民に知っていただく施設となりました。

本書は、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターにおいて、平成12年から平成14年にかけてと平成29年から平成30年にかけて総合治水対策特定河川事業に伴う清洲城下町遺跡の発掘調査と、新川西部流域下水道事業に伴う事前調査として朝日遺跡の発掘調査を行った成果をまとめたものであります。その結果、清洲城下町遺跡では、戦国時代から江戸時代初期にかけての清須城に伴う船着場や城下町の武家屋敷や町屋に関連する遺構や遺物などが発見され、近世城郭の始まりと城下町建設の具体的な姿を考える貴重な資料として注目されています。また、朝日遺跡では弥生時代の居住域があいち朝日遺跡ミュージアムのある貝殻山から西にさらに広がることがわかってきました。今後学術的な資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財の理解への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に対してご理解、ご協力を賜った関係諸機関並びに地元の皆様、発掘調査や資料整理に参加協力していただきました多くの方々に厚くお礼を申し上げます。

令和 3 年 3 月

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 森田 利洋

あさ ひ い せき
朝 日 遺 跡 X

例 言

1. 本書は、清須市西田中長堀地内に所在する朝日遺跡(県遺跡番号 21001:『愛知県遺跡分布地図 I (尾張地区)』1994 による)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、新川西部流域下水道事業に伴う事前調査として、愛知県建設局下水道課より愛知県教育委員会(現・愛知県県民文化局文化芸術課文化財室)を通じて委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが調査を実施した。
3. 調査期間と調査面積は、令和元年 12 月 2 日～12 月 13 日で調査面積は 21 m²である。
4. 調査担当者は、樋上 昇(主任専門員)である。現地における発掘調査は、土木作業が株式会社波多野組(現場代理人:守屋久人)、測量が株式会社アコード(測量士:田村和久)の業務委託を受けて行なっている。
5. 整理および報告書作成作業は、令和 3 年 1 月～3 月で、樋上が担当した。
6. 遺物整理、製図については阿部裕恵・鈴木好美・堀田祐美・前田弘子・山田亜紀子・山田有美子(整理補助員)の協力を受けた。
7. 遺物の実測・デジタルトレースならびに科学分析関連の製図については国際文化財株式会社に委託した。
8. 動物遺存体の同定は株式会社パレオ・ラボ(分析者:三谷智広)に委託した。
9. 出土遺物(本書写真図版)の写真撮影については金子知久氏(スタジオ遊)に依頼した。
10. 発掘調査および報告書作成に際しては、次の関係機関の指導・協力を受けた。
愛知県建設局下水道課(尾張建設事務所)・愛知県県民文化局文化芸術課文化財室・愛知県埋蔵文化財調査センター・清須市教育委員会(五十音順、敬称略)
11. 発掘調査および報告書作成にあたり、次の方々から御教示・御協力を頂いた。
石黒立人・尾崎綾亮・葛西有香・小坂延仁・柴垣哲彦・城ヶ谷和広・原田 幹(五十音順、敬称略)
12. 本書の執筆は、第 1 章～第 3 章・第 5 章を樋上、第 4 章を鬼頭 剛(本センター調査研究専門員)・株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループが担当した。
13. 本書の編集は樋上が行った。
14. 調査区の座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第 VII 系に準拠する。ただし、新基準で表記してある。
15. 調査記録および写真記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町字野方 802 の 24 TEL: 0567-67-4163
16. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町字野方 802 の 24 TEL: 0567-67-4164

目 次

第1章	調 査 の 概 要	1
第2章	遺 構	5
第3章	出 土 遺 物	11
第4章	自 然 科 学 的 分 析	13
第5章	総 括	17

挿 図

図 1	2	図 9	12
図 2	3	図 10	14
図 3	4	図 11	18
図 4	6	図 12	19
図 5	7	表 1	16
図 6	8	写真 1	1
図 7	9	写真 2	17
図 8	10		

遺構写真図版

遺物写真図版

添付 CD

遺構一覧表・出土遺物一覧表

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

朝日遺跡は愛知県清須市から名古屋市西区にかけて所在する東海地方を代表する弥生時代の遺跡である（図1、県遺跡番号21001）。

これまで朝日遺跡は、名二環・一般国道22号線・名古屋高速6号清須線などの建設のため、愛知県教育委員会・愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター・清須市教育委員会・名古屋市教育委員会などが主体となって発掘調査を行ってきた。

今回の調査は新川西部流域下水道事業に伴う事前調査として、愛知県建設局下水道より愛知県教育委員会文化財保護室（現・愛知県県民文化局文化財室）を通じた委託事業として行なった。

調査面積は21㎡で、令和元（2019）年12月2日から12月13日にかけて実施した。

本センターによる朝日遺跡の発掘調査報告書はこれまでⅠ～Ⅷが刊行されている。これに加えて平成2年度年報内の「朝日遺跡発掘調査報告書」を『朝日遺跡Ⅸ』とし、今次報告書は『朝日遺跡Ⅹ』として刊行することとした。

第2節 調査の経過

今回の発掘調査区は道路の中央に南北7m・東西3mの範囲で設定されており、発掘調査と工事と併用するための鋼矢板を事業者が打って、そのなかを掘削するというものであった。

本調査区は国指定史跡貝殻山貝塚に隣接していることから弥生時代前期～後期の重要な遺構・遺物が見つかることが当初より想定されていた。

しかし調査開始時点で遺物包含層が存在せず、いわゆる地山面が露出した状況であった（写真1）。それゆえ、当初計画されていた遺構面3面（換算面積63㎡）は地山面1面の21㎡に、作業実働日数17日は7日へと大幅な短縮となった。

なお、発掘調査に際して土木作業は株式会社波多野組、測量業務は株式会社アコードへ業務

を委託した。

また、遺物の洗浄と乾燥までの一次整理を発掘調査現場の事務所にて行ない、遺物の分類、接合・復元・登録作業は愛知県埋蔵文化財調査センターで令和2年度に実施した。遺物整理作業に際して、出土遺物の実測・デジタルトレースならびに科学分析に関わる図面類のトレースは国際文化財株式会社に、遺物の写真撮影は写真工房遊に業務委託した。



写真1 調査開始前状況（南から）

第3節 歴史的環境

朝日遺跡は愛知県西部の清須市から名古屋市西区にかけて所在する（図1）。

朝日遺跡を中心として半径3km以内の弥生時代遺跡としては、西約2kmの松ノ木遺跡（中期前葉）のみ存在する。次いで近接するのは南東の堀越町遺跡（前期～後期）、南西の阿弥陀寺遺跡（中期）、東の月縄手遺跡（前期）、北の弥勒寺御申塚遺跡（中期末～）である（図2）。

さらに半径5kmに広げると、西に森南遺跡（中期）・大淵遺跡（中期末）、南東に志賀公園遺跡（中期）・西志賀（平手町）遺跡（前期～後期）があり、北には五条川の自然堤防上に遺跡群が連なる。

そして南東方向6kmの名古屋台地北西隅には名古屋城三の丸遺跡（中期）が所在する。

第4節 今次調査区の位置

今回の調査区は、国指定史跡貝殻山貝塚の南西隅に隣接し、平成7・8（1995・96）年度調査区（現・あいち朝日遺跡ミュージアム所在地）の10数m西に位置する（図3）。

このあいち朝日遺跡ミュージアム建設予定地として発掘調査が行なわれた95・96調査区では、北から弥生時代前期の環濠1条、中期前葉の環濠2条、中期中葉の環濠2条に加えて、前期の竪穴建物、中期～後期の方形周溝墓群が確認されている。

特に今次調査区では、95・96調査区で見つかった弥生時代中期中葉の内環濠の西延長線上にあたることから、環濠の検出が期待された。



図1 清須市と朝日遺跡の位置（1：1,000,000）



図2 朝日遺跡と周辺の弥生時代遺跡（1：60,000、地図はスーパー地形を用いた）

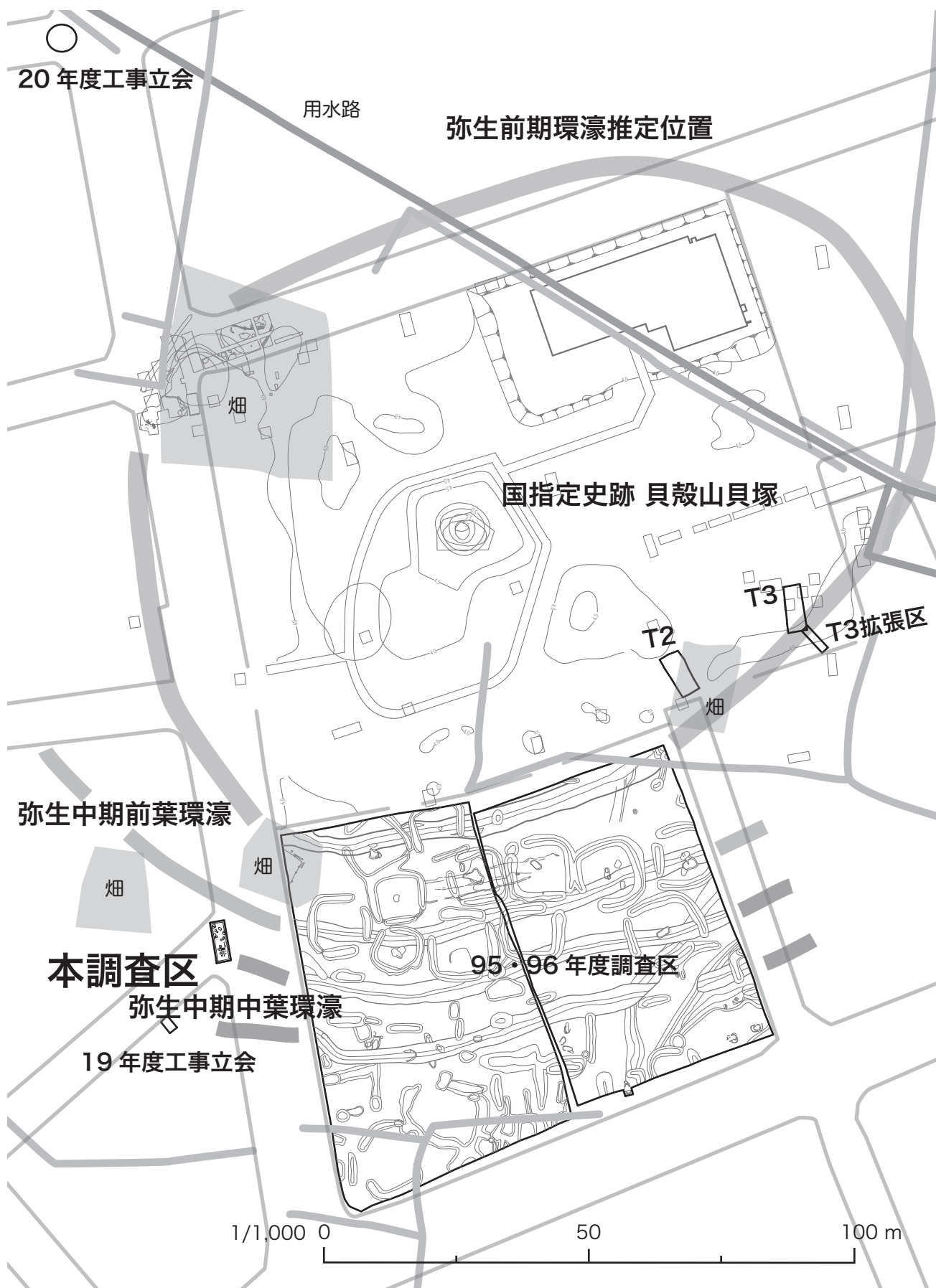


図3 調査区の位置と既往の調査成果 (1:1,000)

第2章 遺構

発掘調査を開始する時点で朝日遺跡の基盤層である灰白色極細粒砂層が露出した状態であったため、弥生時代前期から中期にかけての遺構を全て基盤層の面で検出・掘削することとなった。この基盤層上面の標高は TP2.2 ～ 2.3m を測る。

確認した遺構は溝4条、土坑7基、ピット14基である。

01SD・19SP・20SP 01SDは調査区の北西隅から南東に伸びる溝で、残存長0.8m、最大幅0.36m、深さ0.7mを測る。19SPはこの01SDに切られるピットで、直径0.21m、深さは検出面から0.23mを測る。20SPも01SDに切られており、直径0.22m、深さ0.14mを測る。

02SP 02SPは01SPのすぐ南に位置するピットで、直径0.37m、深さ0.1mを測る。

03SP 03SPは02SPの南東に位置するピットで、長軸0.44m、短軸0.3m、深さ0.35mを測る。埋土は2層からなり、上層に弥生土器を含む。

04SP 04SPは03SPのすぐ南東に位置するピットで、直径0.26m、深さ0.18mを測る。

05SK 05SKは03SPの東に位置する楕円形の土坑で、長軸0.63m、短軸0.43m、深さ0.18mを測る。南東側に向かって一段深くなる。

06SK・09SP 06SKは04SPの東に位置する楕円形の土坑で、長軸0.56m、短軸0.42m、深さ0.16mを測る。埋土は2層からなる。09SPは06SKに切られるピットで、直径0.23m、深さ0.13mを測る。

07SK 07SKは調査区北半の西壁に接し、西端は調査区外に伸びる。南北方向の幅は1.03m、深さ0.28mを測る。今回の調査区では比較的まとまった量の土器が出土しており、わずかに弥生時代中期以降の土器が混じるが、おおむね弥生時代前期に属する。位置的には国指定史跡貝殻山貝塚の周囲をめぐる弥生時代前期の環濠よりは外になり、環濠外まで弥生時代前期の遺構が広がっていたことがわかる。

08SK・24SP 08SKは07SKに切られる楕円形の土坑で、さらに24SPにも切られることから、本遺構も弥生時代前期と考えられる。長軸

0.5m、短軸0.36m、深さ0.3mを測る。24SPは07SKの底で確認したピットで、直径0.16m、深さは検出面から0.15mを測る。07SKに切られることから、本遺構も弥生時代前期に属する。

10SK・27SP 10SKは08SKの東に位置する長楕円形の土坑で、長軸0.6m、短軸0.3m、深さ0.05mを測る。この土坑の底ではピット27SPを確認した。27SPは直径0.25m、深さが検出面から0.18mを測る。

11SP 11SPは10SKの西に位置するピット直径0.32m、深さ0.22mを測る。本ピットには直径0.17mの柱痕跡が残る。

12SK・21SD・22SP・25SK・26SP 11SPの南には攪乱があり、その南に12SKが位置する。直径1.37m、深さ0.2mを測る円形の土坑で、南壁付近には周溝状に幅0.14m、深さ0.17mの21SDがめぐる。床面で22SP（直径0.4m、深さ0.12m）・25SK（直径0.47m、深さ0.06m）・26SP（直径0.13m、深さ0.12m）を確認した。

13SD 13SDは12SKに切られる東西溝で、残存長1.5m、最大幅0.46m、深さ0.23mを測る。西端近くに円形の土坑が重複する。

14SP 14SPは21SDの南に位置するピットで、長軸0.32m、短軸0.24m、深さ0.1mを測る。

15SP 15SPは14SPの東に位置するピットで、直径0.4m、深さ0.2mを測る。

16SP 16SPは15SPの南西に位置するピットで、直径0.3m、深さ0.16mを測る。

18SD 18SDは調査区南東隅に位置する。わずかに残る遺構の肩から最深部までの幅は1.0mで、深さ0.45mを測る。18SDは断面形状から規模の大きな溝の北肩と考えられ、95・96年度調査区との位置関係から弥生時代中期中葉の2条の環濠のうち、内環濠にあたる可能性がきわめて高い。埋土の上層より凹線紋期の土器数点が出土しており、この環濠の埋没時期を示す。

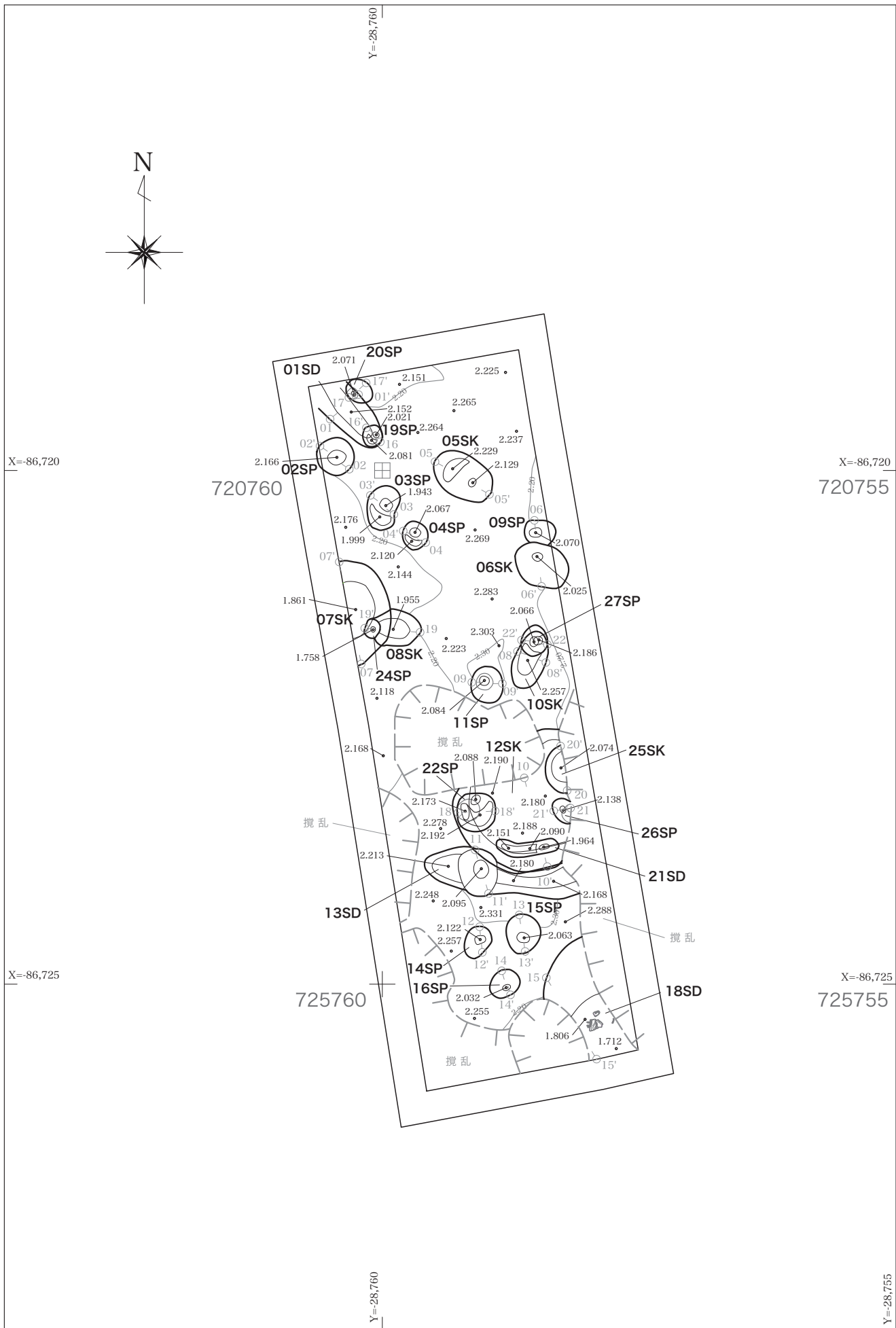


図4 遺構全体図 (1 : 50)

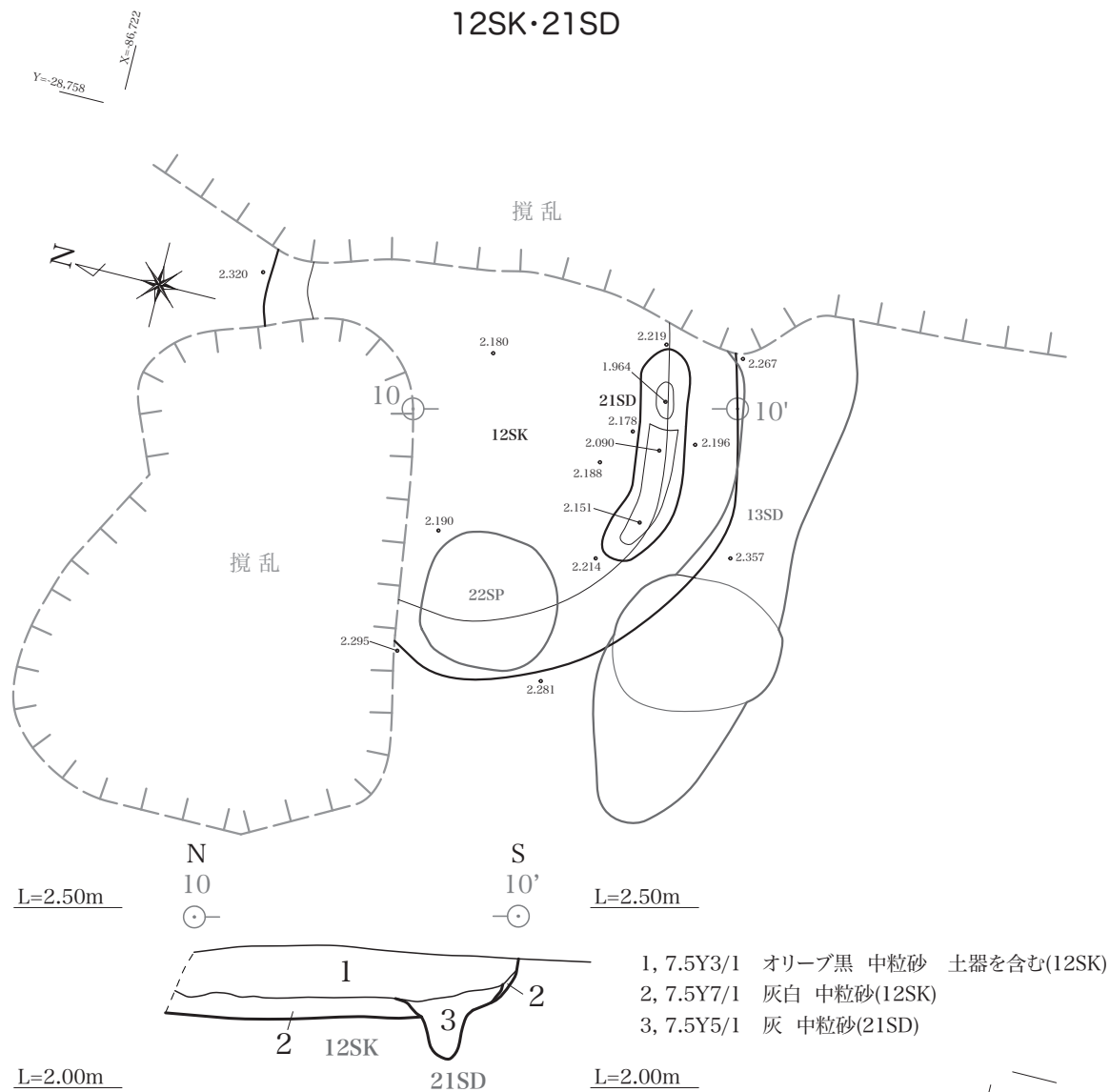
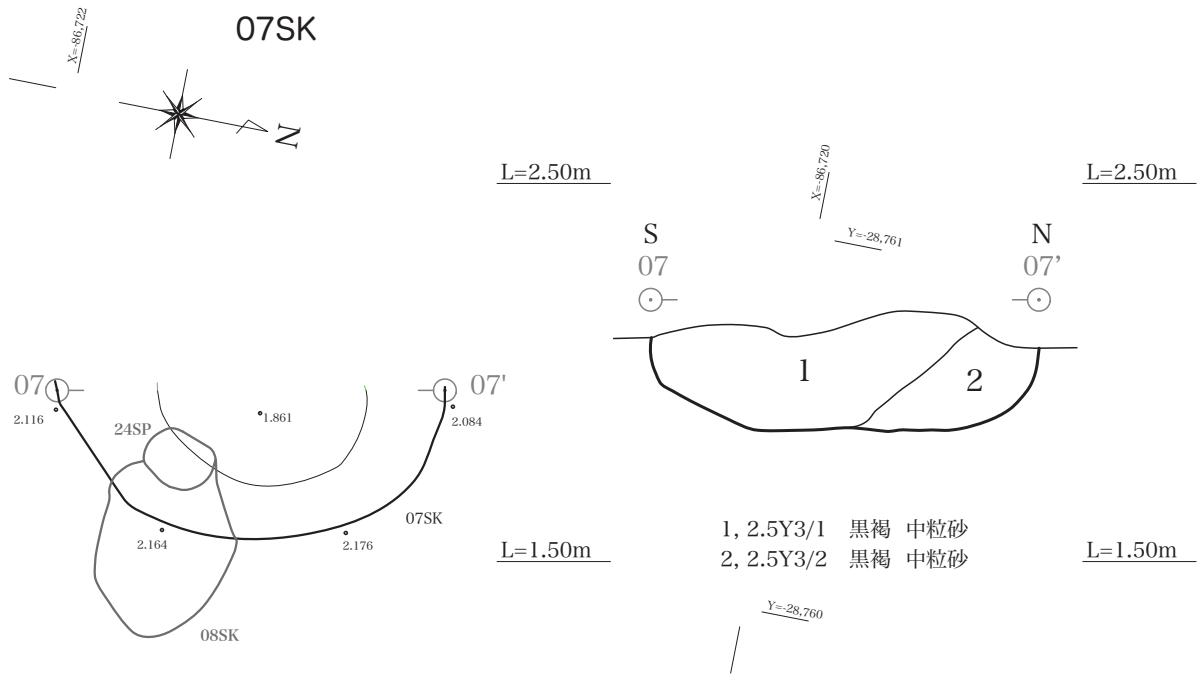


図5 個別遺構図-1 (1:20)

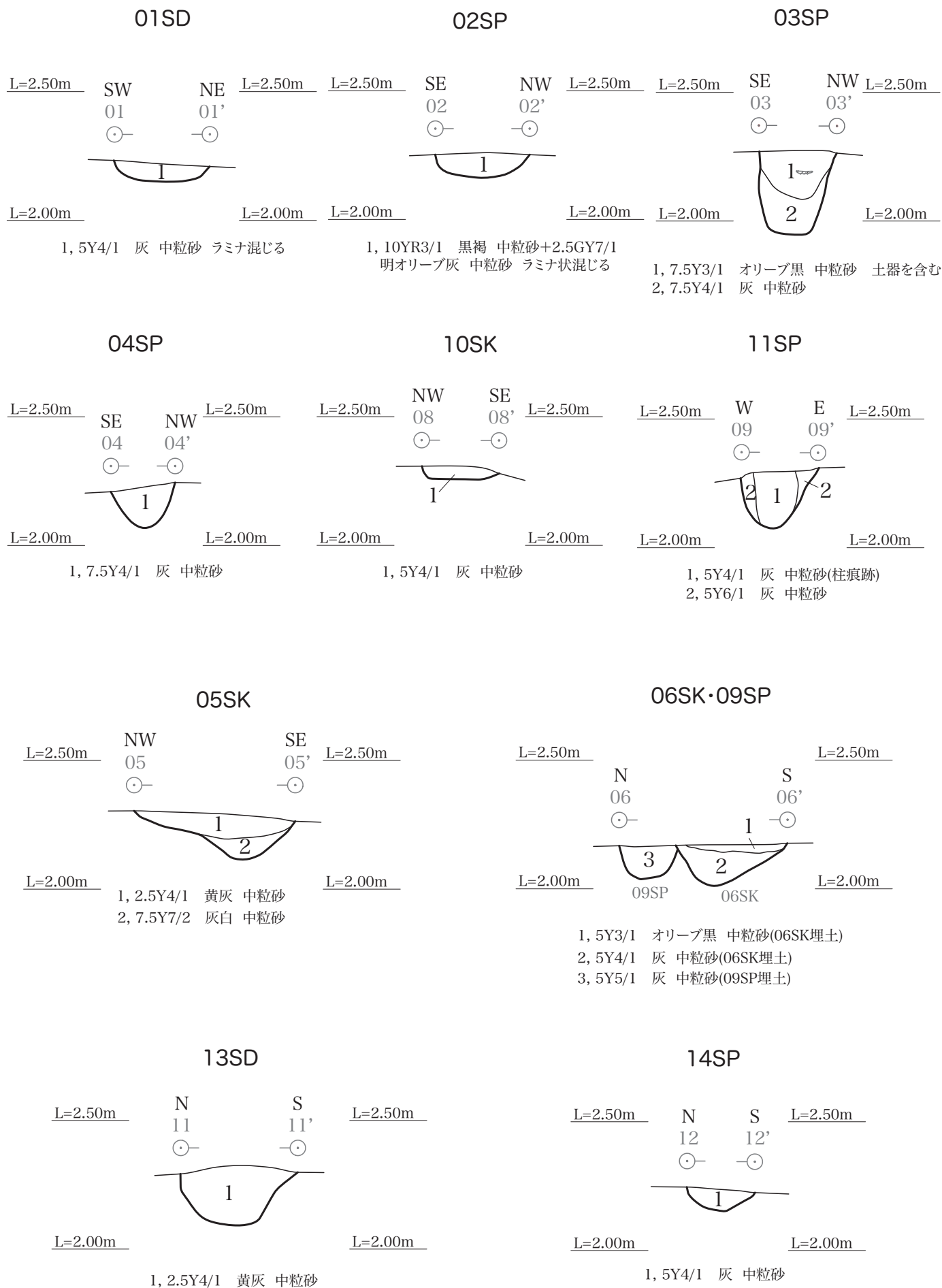


図6 個別遺構図-2 (1:20)

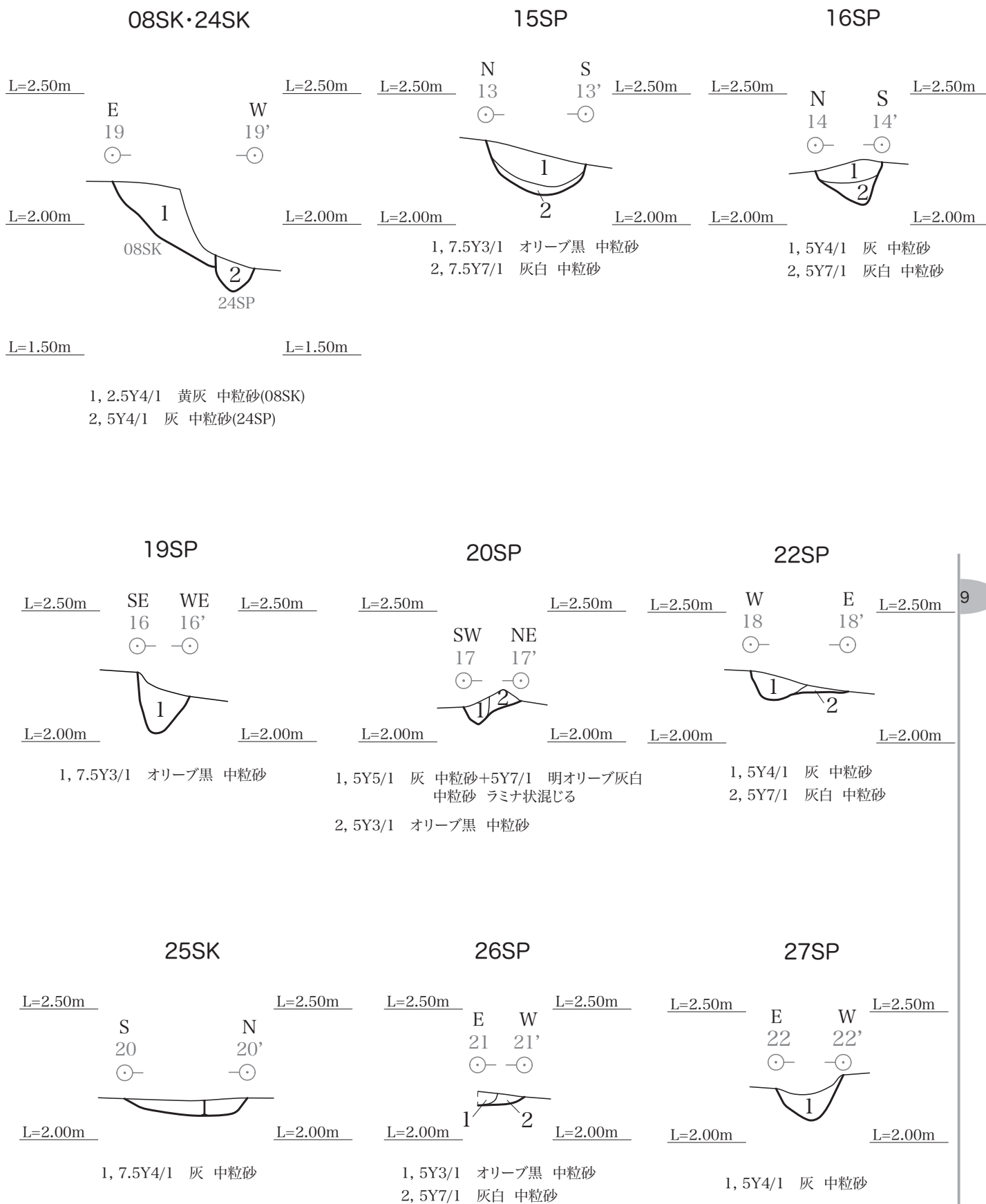


図7 個別遺構図-3 (1:20)

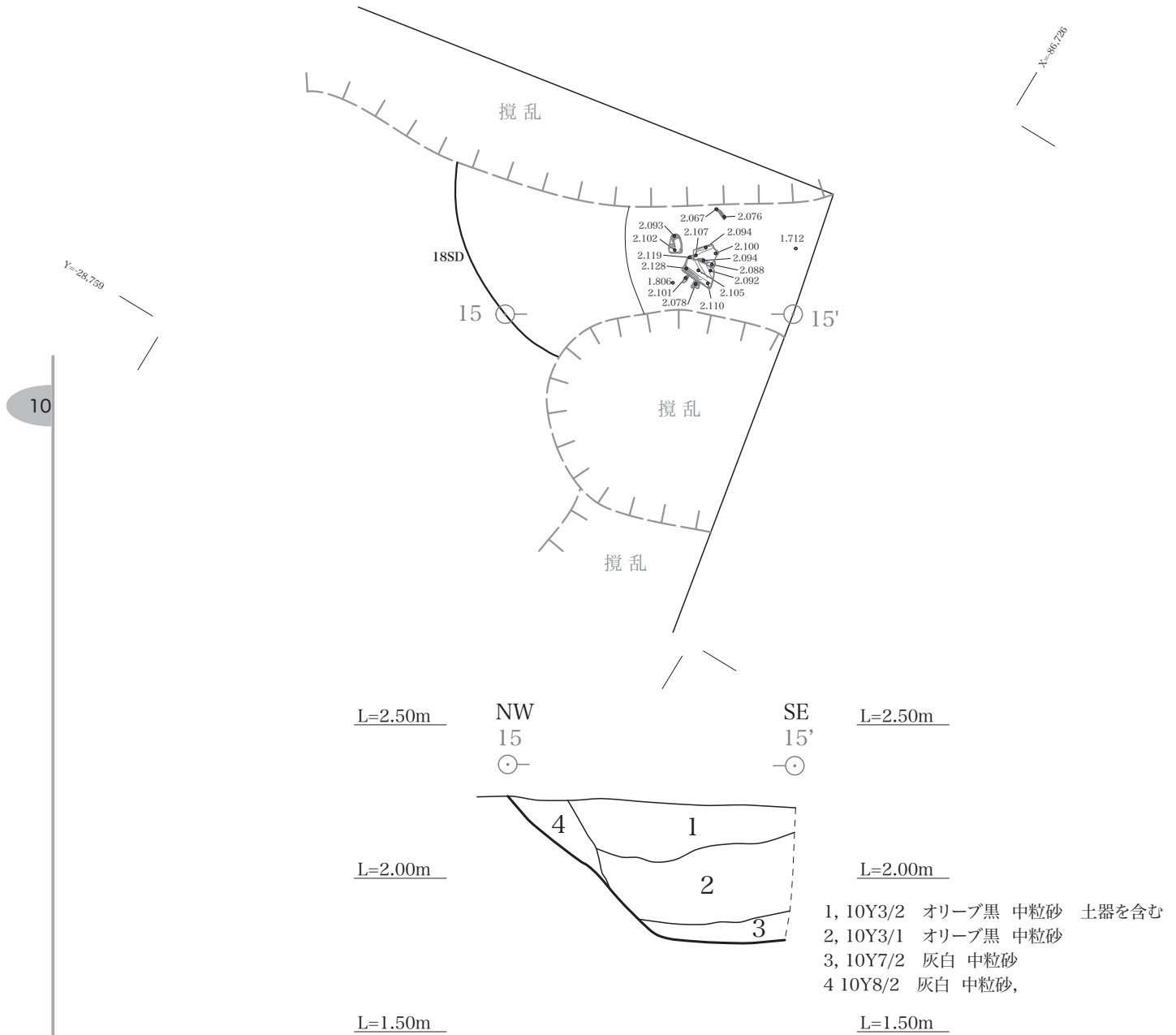


図 8 個別遺構図-4 (1 : 20)

第3章 出土遺物

遺物包含層がなかったため、朝日遺跡としては出土遺物の量がコンテナで4箱ときわめて少ない。さらに人為的な遺物は土器のみで、石器や骨角器の出土は皆無であった。

遺物の所属時期は弥生時代中期中葉後半～中期後葉の凹線紋期（貝田町式期後半～高蔵式期）がめだつが、弥生時代前期と中期前葉の遺物も認められる。特に後述する07SKから、若干の混入はあるものの、弥生時代前期の遺物がまわって出土したことは、東に隣接する国指定史跡貝殻山貝塚との関連で注目される。また、調査区南東隅で確認した18SDは同じく貝殻山貝塚をめぐる弥生時代中期の内環濠の北肩とみられ、その上層から凹線紋期前半の土器が出土したことは、この環濠の埋没時期を示す重要な資料といえる。

07SK

1は条痕紋土器の鉢の口縁。原体は二枚貝の貝殻で、条痕をほどこした後で口縁部を横ナデする。口縁端部にも条痕の押し引きで沈線を加える。在地系。

2・3は遠賀川系の壺の胴部。外面はヘラミガキで内面は板ナデ。

4は凹線紋系土器で細頸壺の口縁部。

5はミニチュアの手捏ね土器の鉢で、凹線紋期から弥生時代後期に下がる可能性が高い。

図示した5点のうち、1・2・3はいずれも弥生時代前期の遺物で、特に2・3は破片が大きくローリングを受けた痕跡も認められないことから、07SKは弥生時代前期の遺構と考えたい。

12SK

6は甕の口縁部。外面は縦ハケののち横ハケ。内面は胴部が板ナデで口縁部は横ハケ。弥生時代中期中葉前半の凹線紋出現以前に属する。

18SD

7は台付鉢の口縁部。口縁端部付近の外面には2条の凹線をめぐらす。調整は内外面ともヘラミガキ。弥生時代中期後葉の凹線紋系土器で伊勢湾西岸からの搬入品か。

8は凹線紋系の甕。外面はタタキ整形ののち口縁部に縦ハケ。口縁部を外反させた後で斜めハケをほどこし、最後に胴部上半に横ハケで仕上げる。内面は、胴部下半が縦方向のヘラケズリで、上半は斜めハケ、口縁部は横ハケ。濃尾平野南部の土器で、弥生時代中期後葉でも前半に属する。

検出 I

9は弥生時代中期前葉の朝日式期の長頸壺の頸部。外面は二枚貝による条痕をほどこす。内面は板ナデ。

10は弥生時代中期中葉前半の貝田町式期に属する長頸壺の頸部。外面は縦ハケののち櫛描紋をほどこす。内面は板ナデ。

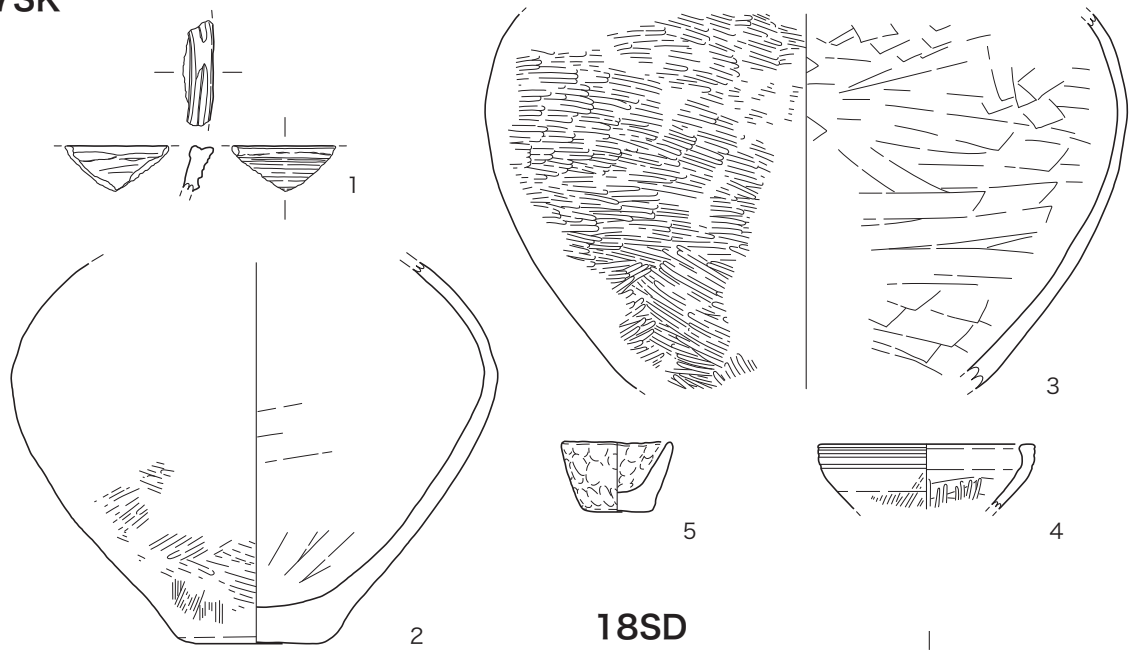
11は凹線紋系の高坏の口縁部で、いわゆる木器写しの水平口縁。口縁端部はわずかに下垂する。上面にはヘラで斜格子の暗紋を施し、外面には櫛で波状紋をめぐらす。凹線紋期でも前半に入る。

12は凹線紋系の台付鉢の口縁部で、端部は内側に傾斜する。外面はヘラミガキののち凹線をめぐらす。その原体は巻き貝の可能性もある。内面は粗いハケ。時期は凹線紋期の中頃。

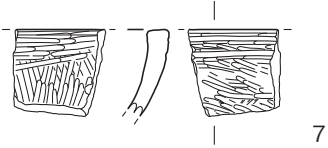
13は底面に黒斑がつく凹線紋系の甕の底部。外面は縦ハケで内面は縦方向のヘラケズリ。

14も甕の底部で外面に縦ハケをほどこす。

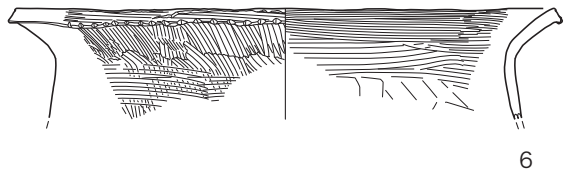
07SK



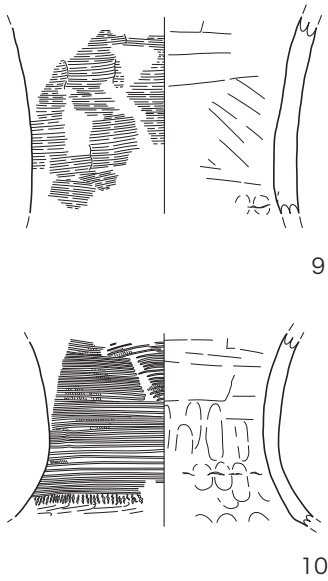
18SD



12SK



検出 I



1/4 0 20cm

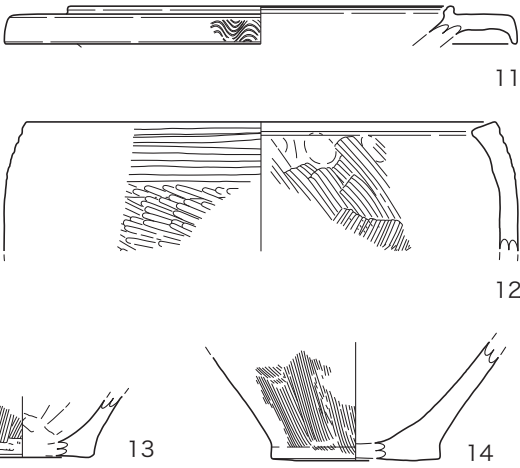


図9 遺物実測図 (1:4)

第4章 自然科学分析

朝日遺跡とその周辺における層序と古環境

鬼頭 剛・株式会社パレオラボAMS年代測定グループ

はじめに

濃尾平野東部、清須市・北名古屋市・名古屋市西区にまたがる朝日遺跡にて地下層序を観察する機会を得た。その層序解析、放射性炭素年代測定および地形解析の結果を報告する。

試料および分析方法

調査区において遺構検出面からバックホーにより掘削し層序断面を露出させ、層序断面の観察を行なった。層序断面の記載にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。また、放射性炭素年代測定を実施した。分析方法の詳細を以下に記す。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析(AMS)法により測定を行なった。加速器質量分析法は125 μ mの篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨(グラファイト)に調整後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製1.5SDH)にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。 ^{14}C 年代値の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。 ^{14}C 年代の暦年代への較正にはOxCal4.4(較正曲線データ: INTCAL20)を使用した。なお、 2σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された放射性炭素年代誤差に相当する95.4%信頼限界の暦年代範囲であり、カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。

調査地点を含めた広域的な周辺地形を解析するため、1/2500スケールで等高線図を作成した。作成には愛知県西春日井郡清洲町発行(市町村合併前の地図を用いたので発行時の市町村名を使用する。)の「都市計画図(1/2500)」、同郡春日町の「都市計画図(1/2500)」、同郡新

川町発行の「都市計画基本図(1/2500)」、同郡西春町発行の「都市計画図(1/2500)」、財団法人名古屋市都市整備公社発行の「用途地域指定図(1/2500)」にプロットされた標高値を基にした。なお解析にあたって、河川堤防や高速道路、工場や学校のような、人工的に建設・造成されたことが明らかな標高値は除外して等高線を描画した。描画後には現地踏査を実施し、さらに航空写真を基に検討を加えた。

分析結果

観察された層相

東西2.7m、南北7.5mで設定された調査区において、現地表(標高3.7m)から1.4m下の東西2.1m、南北6.9mの遺構検出面の南東端において遺構検出面(標高2.3m)からバックホーにて深さ1m6cm(標高1.24m)まで掘削し地層の断面を露出させた(図9a・図9b)。ここで観察されるのは遺跡の基盤層となる灰白色～灰黄褐色を呈する中粒砂層である。砂層を構成する砂の淘汰は良好であり、シルトや粘土といった細粒な堆積物を含まない。砂層全体は塊状かつ均質で、水流による運搬の際につくられる堆積構造は認められなかった。掘削で現れた砂層のさらに下位の地層の状況を確認するためにバックホーにて掘削した。標高1.24mよりもさらに1.5m(標高-0.26m)ほど掘削し、遺跡基盤層となる中粒砂層が地下へ連続することが確認された。砂層の色調は下部へいくほど暗灰色を呈した。砂層はシルト層や粘土層、あるいは腐植物層などを挟むことなく、均質であった。標高-0.26mよりさらに下方へ掘削したところ湧水したため、そこで掘削を中止した(図9c)。

朝日遺跡の地下層序

遺跡においてバックホーにより掘削し、地下層序を観察する機会を得た。遺構検出面である標高2.3mから標高-0.26mまでには層厚約2.5mの淘汰良好で塊状かつ均質な中粒砂層が観察された。これまでの朝日遺跡の発掘調査で



図9 深掘における層相写真

- a. 地表 (標高 3.7m) から 1.4m 下の遺構検出面と深掘により現れた基盤砂層 (東から)
- b. 深掘による基盤砂層断面 (東から)
- c. 標高 -0.26m まで掘削した時の湧水状況 (西から)

は地下層序は標高 1.0m 付近を境に層相を大きく 2 分でき、標高 1.0m 付近よりも標高の高い層準ではシルト層や粘土層といった細粒な堆積粒子から構成され、標高 1.0m 付近よりも標高の低い層準では砂の優勢な層相が卓越していた (鬼頭, 2007)。標高 1.0m という値を砂層の卓越する層相が現れる目安とすれば、今回の調査で砂層が認められた標高 2.3m は、これまでに発掘調査で得られてきた観察結果よりも 1m 以上も標高の高い層準から確認されたことになる。この理由について、朝日遺跡の周辺の地形解析結果を基にすれば、今回の調査地点北側の清須市大字朝日から南の西田中本城、西の朝日弁天、東の阿原までの範囲には南北最大距離約 480m、東西最大距離約 800m で、南および南東方向へ突き出して凸地形をなす舌状の微地形の上にあることがわかった (図 10)。周りに比べて相対的に凸地形をなす地形の高まりを砂堆というが、地形解析で得られたこの凸地形は砂堆状をなしていることがわかる。ちなみに砂堆の用語は海成あるいは河川成といった地形を形成した成因までを含む用語ではないことをお断りしておく。いずれにせよ、貝殻山貝塚資料館の南西にある調査地点は、南および南東方向に突き出した舌状地形をなす砂層からなり、それが標高 2.3m で認められることは新たな知見で

あった。また、この舌状地形南端部西の清須市西田中本城と東の阿原八幡の範囲には長軸約 360m、幅約 480m で北西 - 南東方向の南に開口した谷地形が存在していることがわかる。この谷地形の北西端に今回の調査地点が立地していることがわかった。

以上のように、今回の朝日遺跡の調査地点は地形解析より砂堆状の凸地形の上にあることがわかったが、その周辺についても検討を加えたい。それには愛知県埋蔵文化財調査センターと清須市教育委員会が実施した立会調査・試掘調査の結果が参考になる。今回の調査地点の北側において 2020 年 7 月と 9 月に下水管きょ布設工事に伴う縦坑工事に伴ない、径 2.5m の円形覆工板の内側をグラブバケットにより現

地表下 13m まで掘削する立会調査が愛知県埋蔵文化財調査センターにより行なわれた。掘削方法の性質上、連続的な地層断面の観察は望めないものの、断片的な地層情報を得ることができた。地点 2 では (図 10)、現地表から深度約 2m の標高 0.60m で黒褐色を呈する粘土層が採取され、さらにその下位層には極細粒砂層が見られた。地点 2 のさらに北の地点 3 (図 10) でも黒褐色粘土層とその下位層の緑灰色シルト層が検出された。今回の朝日遺跡の調査地点では標高 -0.26m から標高 2.3m までに塊状・均質な中粒砂層が認められたが、それよりも北へ 180m (地点 2)、北へ 496m (地点 3) 隔たると厚い砂層はみられなくなった。地形解析では北の清須市朝日愛宕から清須市大字朝日を通り、南の朝日弁天にかけての範囲には北東 - 南西方向にのびる浅い谷地形が認められ、周りに比べて標高の低い場所にあたっている。谷状の地形が想定されるため、埋積する堆積物はシルトや粘土などの細粒な堆積物が予想される。地点 2 および地点 3 で確認された黒褐色粘土層は地形解析の結果と調和的である。地点 3 よりもさらに北側では、地形解析において北の清須市春日立作から清須市春日江先を通り、南の清須市阿原にかけて、周りよりも標高の低い谷地形が現れている。この谷地形に関して、清須市教育

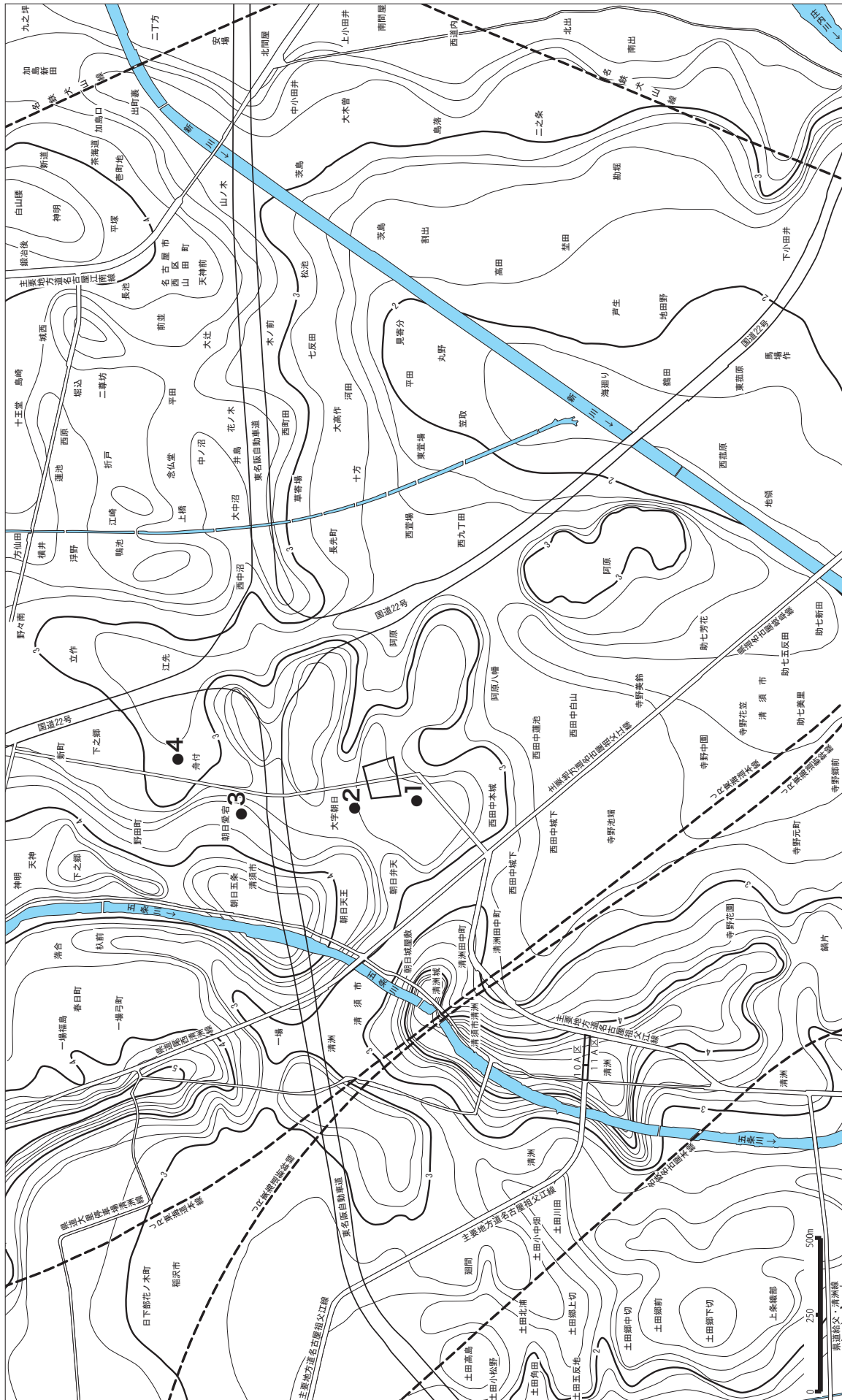


図 10 朝日遺跡周辺の等高線図 黒丸(●)と数字は調査地点を示す。

1. 朝日遺跡調査地点 2. 愛知県埋蔵文化財調査センター立会調査地点(2020年7月) 3. 愛知県埋蔵文化財調査センター立会調査地点(2020年9月) 4. 清須市教育委員会試掘調査地点(2019年1月) 地点1と地点2の間の四角形は貝殻山貝塚資料館の位置を示す。

表 1 放射性炭素年代測定値 地点 4(清須市教育委員会試掘調査(2019 年 1 月))の試料

試料 No.	標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\delta^{13}\text{C}$ PDB (‰)	2 σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	2 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No.(method)
1	-0.11	細粒砂層	土壌	4766 $\pm$ 26	-27.53 $\pm$ 0.11	3636 - 3516 BC (94.2 %) 3391 - 3386 BC (0.7 %) 3420 - 3416 BC (0.5 %)	5585 - 5465 (94.2 %) 5340 - 5335 (0.7 %) 5369 - 5365 (0.5 %)	PLD - 41331 (AMS)
2	1.49	極細粒砂混じり粘土質シルト層	炭化材	1714 $\pm$ 20	-24.32 $\pm$ 0.10	326 - 408 AD (72.0 %) 256 - 284 AD (23.4 %)	1624 - 1543 (72.0 %) 1694 - 1666 (23.4 %)	PLD - 41330 (AMS)

委員会が 2019 年 1 月に実施した試掘調査とそれに伴い実施した深掘の結果が参考となる。今回の朝日遺跡の調査地点から北へ 690m 隔たった名古屋第二環状自動車道(名二環)の清洲 JCT 北西側の試掘地点(地点 4)では(図 10)、下位層より標高 -0.13m ~ 標高 0.17m に灰白色の細粒砂層がみられた。本層の標高 -0.11m から放射性炭素年代測定用の試料(試料 No.1)を採取した。標高 0.17m ~ 標高 2.18m は褐灰色(10YR4/1)の極細粒砂混じりの粘土質シルト層からなる。塊状・均質で堆積構造はみられない。本層の標高 1.49m から放射性炭素年代測定用の試料(試料 No.2)を採取した。標高 2.18m ~ 標高 2.65m は灰黄褐色(10YR4/2)のシルト質粘土層であり、標高 2.65m ~ 標高 2.74m は暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)のシルト質粘土層である。標高 2.74m ~ 標高 2.80m は暗灰黄色(2.5Y4/2)の細粒砂混じりのシルト質粘土層であった。標高 2.80m ~ 標高 2.91m は黄褐色(2.5Y5/3)のシルト質粘土層であり、本層は現代の水田の床土である。標高 2.91m ~ 標高 3.24m は暗灰黄色(2.5Y4/2)を呈する細粒砂混じりのシルト層であり、本層は現代の水田の耕作土である。本層の頂部が地表となる。最下位層である標高 -0.13m ~ 標高 0.17m の細粒砂層の、標高 -0.11m から採取した土壌の放射性炭素年代が 5585-5465 cal yrs BP (3636-3516 BC: PLD-41331)と 5500 年前代の数値年代であった(表 1)。いっぽうで、標高 0.17m ~ 標高 2.18m には極細粒砂混じりの粘土質シルト層が認められ、本層の標高 1.49m から採取した炭化材の放射性炭素年代は 1624-1543 cal yrs BP (326-408 AD: PLD-41330)と 1600 年前代であった(表 1)。朝日遺跡の地下層序から得られる放射性炭素年代測定値に関し、今回の調査地点から約 700m 北東の名二環の清洲 JCT を中心とした調査地点の地層観察と放射性炭素年代測定値を基に、鬼頭(2007)は朝日遺

跡でみられる地層の特徴をまとめた。それによれば、標高 0m を基準として、それよりも低い層準から採取された試料はおおむね約 5000 年前から約 4000 年前代の値を示し、標高 0m よりも高い層準から得られた試料では約 3000 年前から約 1500 年前代を示すものが多かった。地点 4 で得られた数値年代も同様の傾向を示しており、朝日遺跡の周辺では同じような堆積作用が生じていたことがわかる。今回の調査地点では標高 -0.26m から標高 2.3m までに至る厚い中粒砂層が認められ、清洲 JCT 地点の層相と比べると、それよりも約 1m 高い層準まで粗粒な堆積物が卓越していることがわかった。地形解析からは、調査地点は北の清須市大字朝日から南の阿原八幡までに南北最大距離約 480m、東西最大距離約 800m で、南および南東方向へ突き出た凸地形をなす舌状の微地形の上にあり、この地形は中粒砂層から構成されていることが明らかとなった。

謝辞

本論を作成するにあたり、愛知県埋蔵文化財調査センターの小坂延仁氏、清須市教育委員会の柴垣哲彦氏には立会調査・試掘調査の際に地層観察の機会を与えていただくとともに、地層の情報をご教示いただいた。図表の作成では国際文化財株式会社にお手伝いいただいた。分析試料の整理・保管と原図の作成では整理補助員の前田弘子氏・鈴木好美氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

文献

鬼頭 剛, 2007, 朝日遺跡における堆積および地形環境, 蔭山誠一編 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第 138 集 朝日遺跡 VII (第 3 分冊 総括), 愛知県埋蔵文化財センター, 154-171.

第5章 総括

朝日遺跡貝殻山貝塚地区における 弥生時代中期の集落と環濠の復元

今回の調査区は、朝日遺跡発祥の地とされる弥生時代前期の環濠集落である史跡貝殻山貝塚の南西側に位置し、2020年11月にオープンしたあいち朝日遺跡ミュージアムのは真西にあたる。このあいち朝日遺跡ミュージアムの敷地は、1995・96年度に当センターによって発掘調査がおこなわれ、弥生時代前期の環濠1条、中期前葉の環濠2条、中期中葉の環濠2条のほか、弥生時代中期から後期にかけての方形周溝墓群が確認されている（愛知県埋蔵文化財センター2000）。

今次調査区の南東隅で東西方向に走るとみられる大溝18SDの北肩を確認しており、95・96年度で確認した弥生時代中期中葉の内側の環濠

(SD103)のほぼ延長線上に位置することから、18SDはこの弥生時代中期中葉の内環濠と考えて差し支えない。

さらに、我々が調査をおこなっている最中に、調査区に近接する民間会社の浄化槽の据え付け工事があり、清須市教育委員会が立会調査をおこなった。それによると、この地点でも朝日遺跡の遺構埋土である黒色中粒砂の大きな落ち込みを確認している（写真2）。この位置は弥生時代中期中葉の外環濠（SD104）の延長線上にあたることから、この遺構が環濠である可能性が高い。

さらに、今次調査の契機となった下水道工事が2020年度にもあり、史跡貝殻山貝塚の北北西約50mの地点で掘削がおこなわれた。これには愛知県埋蔵文化財調査センターが立会調査をし、樋上もこれに同行した。円形の鋼矢板を打って中を掘削機で掘り下げる工事であったた



写真2 2019年度工事立会 東壁土層堆積状況（北西から）



図 11 1945 年撮影の米軍写真に現道と検出遺構を重ねた復元図 (1 : 2,000)

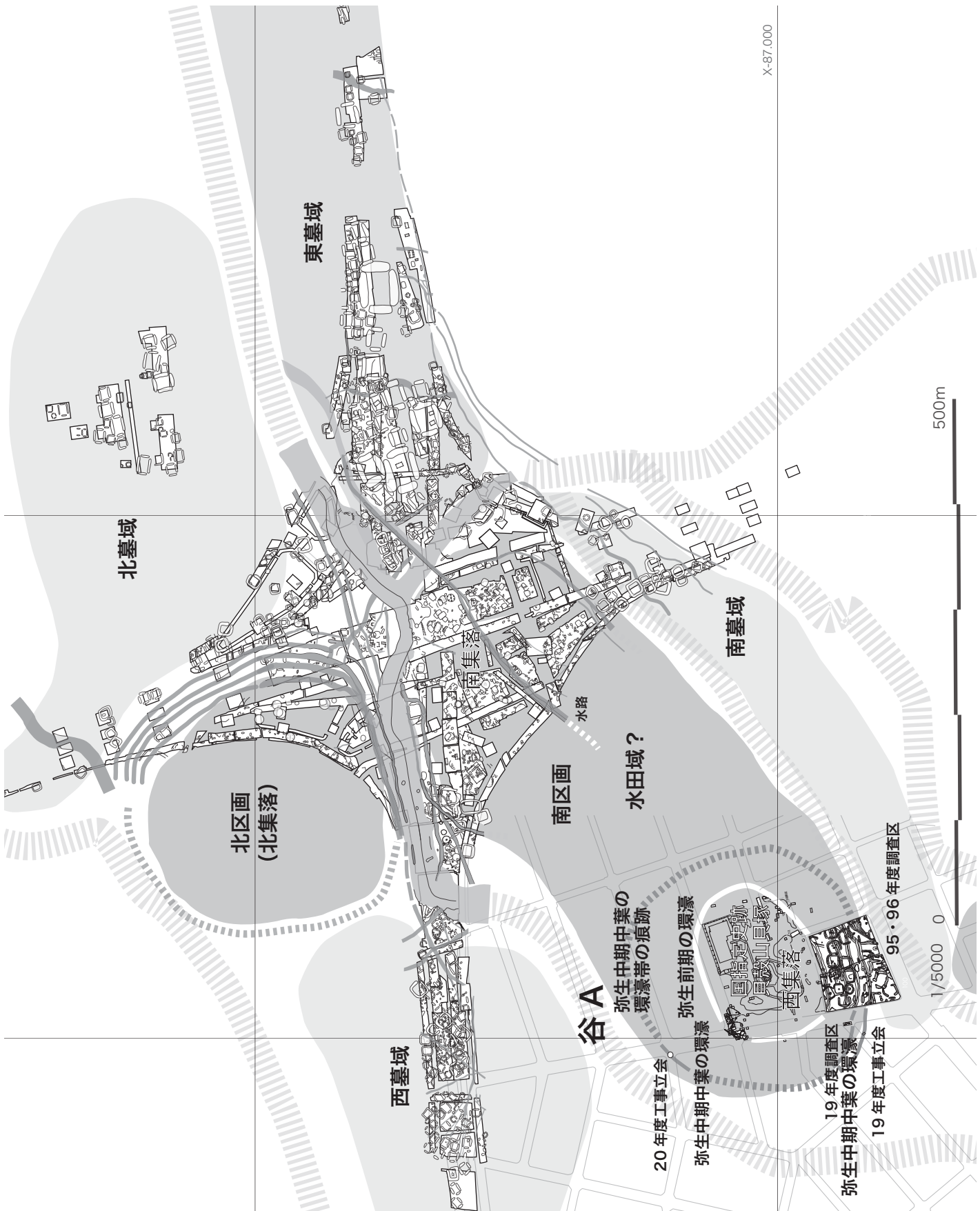


図12 弥生時代中期前葉～中葉の朝日遺跡全体図 (1:5,000)

め、土層の確認はできなかったが、かなり深い位置で黒色中粒砂を埋土とする遺構の存在を知ることができた。

スーパー地形 (<https://www.kashmir3d.com/online/superdemapp/>) というアプリケーションを用い、現在の地図に米軍が撮影した 1945 年の航空写真を重ね、さらに本調査区を含めた上記 3 地点をプロットしてみると、興味深いことがわかった。

米軍撮影の写真はモノクロだが、よく観察すると地下の埋没地形を示すソイルマークが見取れる。埋没した河川や大溝は埋土中の含水量が多いため、モノクロ写真ではおおむね黒く写る。そして、上記 3 地点や弥生時代前期の環濠、そして朝日遺跡の北集落と南集落を隔てる谷 A の痕跡が黒い帯として明瞭に認められることが明らかとなった (図 11)。これにより、従来の復元図 (愛知県埋蔵文化財センター 2009) による南集落の西端がほぼ確定した。

さらに、この弥生時代中期中葉の外環濠 (19 年度工事立会および 20 年度工事立会地点) の延長線上に位置する黒い帯を東に追いかけると、県文化財室による弥生時代前期の環濠 (おおむね史跡貝殻山貝塚の範囲をめぐる) の復元位置の北側から東側へと湾曲しているらしいことがわかった。

これまで愛知県教育委員会・愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センターなどが発掘調査を積み重ねた末に公表された朝日遺跡の弥生時代中期前葉～中葉の復元図では、谷 A の南に位置する南集落の環濠は、現在の国道 22 号線 (名古屋高速 6 号清須線) から名二環の清洲ジャンクションを経て、そこから南西に伸びて史跡貝殻山貝塚を囲むと考えられてきた。しかし、改めて清洲ジャンクション付近での南集落の環濠とされてきた大溝をよく見ると、じつは環濠として完全に閉じていない。そして、大溝が広く途切れる地点には、北東から南西方向に一直線に伸びる大溝が存在している。

いっぽう、今次調査区を含む史跡貝殻山貝塚地点では、米軍撮影の航空写真によって、直径約 220m の範囲で弥生時代中期中葉の環濠が閉じてしまう可能性が高くなった。これらのことを勘案すると、清洲ジャンクション南西側のい

わゆる南集落と、史跡貝殻山貝塚を囲む環濠集落とは異なる居住域であったということになる。

この旧来の南集落と史跡貝殻山貝塚との空閑地については、これまで清須市教育委員会などによってたびたび工事立会がおこなわれているが、居住を示す明瞭な痕跡が確認されていない。

以上のことから、谷 A の南の北東から南西方向に伸びる東西 600m、南北 250m の巨大な微高地 (南区画) には、清洲ジャンクション付近の環濠として完全に閉じられない居住域 (南集落) の西に、空閑地を挟んで弥生時代前期の環濠集落をさらに一回り大きくした二重環濠の集落 (仮に西集落とする) の 2 つの居住域があったと考えるのが妥当であろう (図 12)。

この南集落と西集落の間の空閑地については、北墓域と東墓域の中間地点あたりより水路が南集落を縦断してこの空閑地へと伸びることから、石黒立人はこのエリアが水田域ではないかと想定している。この水田域の面積は、石黒の試算ではおよそ 2ha が想定され、朝日遺跡居住者の全人口を賄うには至らないものの、集落内における貴重な耕作地として、弥生時代後期に至るまで維持されていた可能性が高い。

上記のように、もしここが水田域であるとするならば、工事立会のような極小面積の掘削で畦畔や水田耕作面を確認することはきわめて困難である。それゆえ、稲のプラントオパールを検出など、土壌サンプルの理科学的な調査手法の積極的な導入が求められる。

これまで朝日遺跡では、弥生時代後期の西墓域周辺以外に水田可耕地を想定することが難しく、そのことが朝日遺跡における生業を考えるうえで大きな課題となっていた。今回の調査と航空写真からの環濠復元によって、南集落と西集落の間にまとまった面積の水田域が想定できたことによって、弥生時代中期における朝日遺跡全体の集落景観を考え直す大きなきっかけとなり、それがこれからの朝日遺跡の調査研究方法の再検討へとつながることに期待したい。

引用文献

愛知県埋蔵文化財センター 2000 『朝日遺跡Ⅵ』
愛知県埋蔵文化財センター 2009 『朝日遺跡Ⅶ』



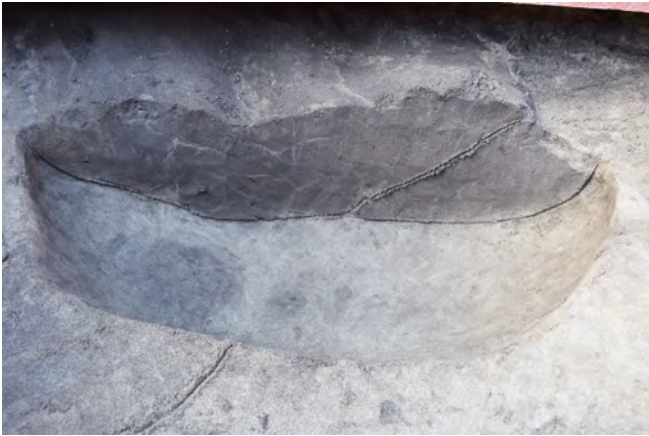
調査区北半部 遺構検出状況（東から）



調査区南半部 遺構検出状況（西から）



遺構完掘状況（真上から）



07SK (東から)



08SK・24SP (北から)



12SK (西から)



18SD 土層断面 (北西から)



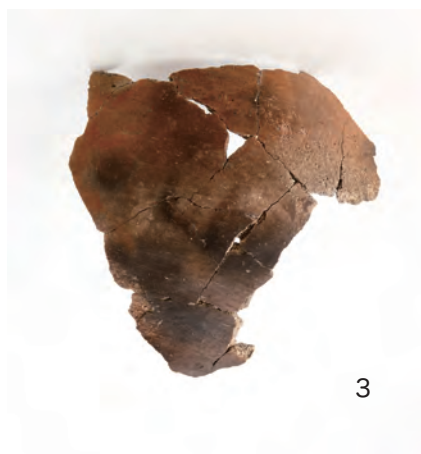
18SD 遺物出土状況 (北西から)



18SD 完掘状況 (北西から)



2



3



1



4



8



7



5



6



9



12



11



10



13



12

報告書抄録

ふりがな	きよすじょうかまちいせき あさひいせき							
書 名	清洲城下町遺跡 朝日遺跡							
副 書 名								
巻 次	X							
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第148集							
編著者名	蔭山誠一、鬼頭 剛、堀木真美子、杵名貴彦、武部真木、樋上 昇							
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL 0567(67)4161							
発行年月日	西暦 2021年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
きよすじょうかまちいせき 清洲城下町遺跡	あいちけん きよす し 愛知県清須市 きよす ほか 清洲他	23233	210002	35度 12分 36秒	136度 50分 19秒	2000.12.11～ 2001.3.30 2002.1.7～ 2002.2.27 2017.7.18～ 2017.9.1 2018.6.12～ 2018.10.12	4,400㎡	総合治水対策特定河川事業に伴う発掘調査
あさ ひ い せき 朝 日 遺 跡	あいちけん きよす し 愛知県清須市 にし たなかながほり 西田中長堀	23233	210001	35度 13分 04秒	136度 51分 03秒	2019.12.2～ 2019.12.13	21㎡	新川西部流域下水道事業に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
清洲城下町遺跡	城館 集落	鎌倉時代・ 室町時代・ 戦国時代・ 江戸時代	石垣・柱穴列・井戸・ 土坑・溝・自然流路		土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗・小皿・常滑産饅・施釉陶器・漆碗・柱材・木簡・柿経・卒塔婆・曲物・桶・下駄・箸・茶臼・白・砥石・五輪塔・鉄鏝・刀子・釘・トリペ・鉄滓		「一斗付口上清須外」・ 「ほしの新右衛門」 墨書木簡出土	
朝 日 遺 跡	集落	弥生時代 前期 中期	土坑 環壕・溝・土坑		弥生土器		貝殻山貝塚をめぐる 弥生時代中期の内環 濠を確認	
文書番号		清洲城下町遺跡：発掘届出(12埋セ第129号・2000.9.8) 通知(12教生第216-28号・2000.9.29) 終了届・発見届・保管証(12埋セ第222号・2001.3.30) 鑑定結果通知(12教生第216-28号・2001.5.28)、発掘届出(13埋セ第126号・2001.11.6) 通知(13教生第36-22号・2001.11.26) 終了届・発見届・保管証(13埋セ第170号・2002.2.28) 鑑定結果通知(13教生第36-22号・2002.3.27)、発掘届出(29埋セ第25号・2017.6.9) 通知(29教生第1063号・2017.6.19) 終了届・発見届・保管証(29埋セ第65号・2017.9.6) 鑑定結果通知(29教生第2037号・2017.9.25)、発掘届出(30埋セ第9号・2018.4.20) 通知(30教生第483号・2018.5.9) 終了届・発見届・保管証(30埋セ第74号・2018.10.19) 鑑定結果通知(30教生第2788号・2018.11.22) 朝日遺跡：発掘届出(31埋セ第86号) 通知(31教生第2551号) 終了届・発見届・保管証(31埋セ第100号) 鑑定結果通知(31教生第3521号)						
要約	清洲城下町遺跡：清須城中堀の東からの五条川に隣接する櫓跡と船着場跡、中堀と外堀の間にある武家屋敷跡・寺院跡と町屋跡と推定される遺構と出土遺物を確認した。今後の清須城とその城下町を考える上で貴重な資料になるものと思われる。 朝日遺跡：弥生時代前期の土坑1基と中期中葉の大溝ほかを確認した。このうち中期中葉の大溝は、史跡貝殻山貝塚を中心とする居住域をめぐる二重の環濠のうち、内側の環濠にあたる。							

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第148集

清洲城下町遺跡X 朝日遺跡X

発行年月 2021年3月31日

編集・発行 (公財)愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 新日本法規出版株式会社